

## 蕪村春帖と江戸春帖

——『宇都宮歳旦帳』の位置——

清 登 典 子

### はじめに

本稿では、「春帖」の呼称を「歳旦帖(帳)」と「春興帖」との総称として用いる。(注)周知のように「歳旦帖(帳)」とは、俳人が自身や門人、知友の歳旦、歳暮吟や春興吟(歳旦以外の春の景物、行事を詠んだもの)などを集めて、年頭の挨拶の意を込めて版行したものである。一方、同様の意図に基づきながら、特に新年に入ってから歳の吟、春興吟中心の編集を行なっているものを「春興帖」と呼ぶことにする。両者を一括して「春帖」と呼ぶのは、そこに共通して新しい年(春)を迎える喜びと、一門の結束を誇り、繁栄を願う姿勢が見られることによる。また新年の挨拶がわりの配り物としての要素も強いと言えよう。これに対して春興吟中心で、春興句のみからなるものであっても撰集としての意識の強いものは「春興集」と呼び、「春帖」からは切り離して捉えることにしたい。

蕪村は生涯の内にそれほど多くの編著を残さなかったが、その中で春帖の占める割合は高いものとなっている。今日知られる蕪村編の歳旦帖としては、寛保四年(一七四四)に出され、普通『『宇都宮歳旦帳』』(以下この称を用いる)の名で呼ばれているものや、明和八年(一七七二)の『明和辛卯春』、安永四年(一七七五)の『安

永四年夜半亭歳旦』の三書があり、春興帖としては安永六年（一七七七）の『夜半楽』と天明二年（一七八二）の『花鳥篇』の二書が挙げられよう。これらの蕪村編春帖が江戸春帖とも関わりを持って成立していたことは、晩年に出版された二つの春興帖に見られる江戸俳諧への親近感の表明からも窺うことができる。

本稿では、江戸春帖と蕪村春帖との関わりについて検討する手始めとして、寛保四年刊『「宇都宮歳旦帳」』を取り上げ、蕪村が関東に在住していた時期の江戸春帖との比較検討を通じて、その位置や問題点について考察を加えたいと思う。

なお、蕪村春帖と地方系春帖との関わりについては、すでに田中道雄氏によって『明和辛卯春』から『初懐紙』へ——夜半亭春帖の変容——<sup>(注2)</sup>や『地方系春帖と蕪村一派——特に構良をめぐって——』<sup>(注3)</sup>などの論稿が出されており、優れた成果が示されている。本稿も、このような成果の上に立って、蕪村春帖と江戸春帖との関わりを見るものである。

## 一

では、『「宇都宮歳旦帳」』について見ていくことにしよう。この書は蕪村最初の編集書であったと同時に、『蕪村』号が最初に用いられた書としても注目されて来ており、その蕪村号による最初の発句「古庭に鶯鳴きぬ日もすがら」の句は、蕪村調の出発点を示す句としても高く評価されている。

そこで、まず同書の体裁から見て行くと、現存の中村家蔵本では、中本一冊で、本文共表紙に「寛保四甲子／歳旦歳暮吟／追加春興句／野州宇都宮／溪霜蕪村輯」と五行の文字がそれらの文字を囲む円形の枠とともに刷られている。表紙以外八丁の小冊であり、挿絵も野線もない簡素な作りとなっている。

次に内容であるが、一丁目表は「正朔吟」の賀題が付され、「いぶき山の御燈に古年の光をのこし、かも川の水音にや／春を告たり」の前書きを持つ宰鳥・露鳩・素玉による三ツ物一組を載せる。三ツ物とは、（歳旦）発句・脇句・第三の三句を三人で詠んだもので、古くから歳旦帖に特有の形式として広く行われているものである。

一丁目裏から二丁目裏までは、同じ「マ」(正朔吟)の賀題を持つ三ツ物が六組並ぶ。しかも、巻頭の三ツ物も含めると七組の三ツ物を、宰鳥・露鳩・素玉・露長・嶺月・條風・江雨の七人の詠者がそれぞれに発句・脇・第三句を一回ずつ詠むという三ツ物七組形式(注4)が取られている。三丁目からは、「東君」「聖節」「青帝」「淑気」「履瑞」などの賀題を付された歳旦発句が二十一句、四丁目裏の二行目まで並ぶ。以下、六丁目表の一行目までは、「歳末 坐順昆交」の題のもと、二十二句の歳暮発句が続く。歳暮発句の末尾に置かれているのは「水引も穂に出けりな衣くばり」の宰鳥号による蕪村発句である。そして、以下は「春興」の題のもと、春興発句が「結城」「下館」「関宿さか井」などの地域ごとにとまとめて並べられ、「軸」として「古庭に鶯啼きぬ日もすがら」の発句がはじめて「蕪村」号で出る。さらに「追加」「追附」として「東都」「俳人の春興発句が並べられる。ちなみに、巻末に置かれたのは「四十のはるを迎て」の前書きをもつ「七種やはじめて老の寢覚より」という存義の発句であった。

このように見てくると、『宇都宮歳旦帳』は基本的に、歳旦・歳暮・春興句の三部構成で成り立っていることが理解される。しかも、歳旦句・歳暮句の割合に比べて春興句がかなりの比重を占めている点が注目される。具体的な数字で示せば、全発句数九十二句のうち、歳旦発句(三ツ物発句を含む)が二十八句で三〇・四パーセント、歳暮発句が二十二句で二三・九パーセント、春興発句が四十二句で四五・七パーセントとなり、春興句が半数近くを占めていることがわかる。このような構成は、当時の一般的な歳旦帖の概念からすると、かなり特異なことと思われる。というのも、本来「歳旦帖」というものは、歳暮・歳旦句を基本としたものであり、春興句は歳旦句の中に混在させられている場合が多く見られるからである。

田中道雄氏は、先に取り上げた「地方系春帖と蕪村一派」の中で、明和半ば頃から地方系蕉門俳壇の中に歳旦・歳暮句よりも春興句を重視する傾向の表れることを指摘されているが、寛保四年という早い時期に、蕪村がすでに、春興句を意識的に歳旦句や歳暮句と並ぶ存在として扱い、このような春興句重視の春帖を編集していたことは注意されなければならないだろう。

次に『宇都宮歳旦帳』の春興句の詠風の方を見てみると、

青柳にうたれて眠る牛の面 花麦

二三里は曲らぬ道や土筆 通星

麦洗ふ流の末のむめ椿 十城

砂川や土を見付てつくつくし 文楼

蒲公や塘の下の茶の匂ひ 楚由

のどかさの跡へ流るゝ小舟かな 可客

などのような自然詠、郊外詠の句の存在が目につく。「軸」として置かれた蕪村の

古庭に鶯啼きぬ日もすがら 蕪村

の句もまた、これらの春興句に並んで調和を保って存在している。

もちろん、一句のみではあつたが、言葉あそび、もじりの句として

夜明くる寒はあやなし梅の花 雲帳

のような句もあり、ほかにも

何ものゝ梅こぼしけむ炭たはら 喜雀

梅がゝや隣の娘嫁せし後 潭雨

むめがゝや烏帽子着ぬ日の男ぶり 潭考

というような人事的な趣向の句。また、

梅さくや膳所の家中の迎駕 風篋

しら梅や御室を出る児法師 田洪

梅がゝや画具のはげる御所車 阿推

などのような場所の設定や、取り合わせの句というような趣向的、知巧的な句も目に付いた。

しかし、これら趣向性のある句の場合でも、観念性は希薄であり、春の美的情緒を表現するために、趣向が凝らされている点に特色が見られる。また、春興句の中に、都市俳諧の特色の一つである擬人化や見立ての技法が見られないことも大きな特徴と言えよう。

これらの春興句を眺める時、そこに後の蕪村調とも共通する詠風を認めることが出来る。特に、梅の香りと絵の具のはげた御所車とを取り合わせた「梅が、や画具のはげる御所車」の句などは、ただちに、散る梅と螺鈿細工のこぼれた卓とを取り合わせた、蕪村の「梅ちるや螺鈿こぼるゝ卓の上」の句を想起させるものである。このような「取り合わせの新奇、それも特殊な場の設定を意図する部類の作」が、都市俳諧の手法の中でも蕪村たちが継承した技法であるということが、すでに前掲の「地方系春帖と蕪村一派」において田中道雄氏により指摘されているが、『宇都宮歳旦帳』の春興句からも、そのことが裏付けられることと思う。

## 二

さて、このような『宇都宮歳旦帳』の性格は、当時の江戸春帖と比較して、どのような特色を持つものなのであろうか。当時の江戸春帖の流れを受けてのものであったのか、あるいはかなり独自なものであったのか、次にそのことを蕪村が関東に在住していた時期（享保二十年頃から宝暦元年まで）の江戸春帖と比較することで検討してみたい。

検討にあたっては、①体裁②構成③巻頭・巻尾④連句・その他⑤発句比率（歳旦・歳暮・春興・その他の比率）、の五項目に注目し、その特色を見ていく。また、春興句の詠風についても、句例を挙げながら後から検討することにする。なお、②構成の項目で用いる符号については説明しておく、「+」符号でつないだものは、前後関係にあることを示し、「・」符号でつないだものは混在関係にあることを示す。たとえば「歳旦句+歳暮句」とあれば、歳旦句と歳暮句が混在していることを示す。また（ ）に入れたものは、その前にあるものと入れ替わる可能性があることを示し、「[」

に入れたものは、パターン化した組み合わせであることを示す。たとえば、「歳旦句+歳暮句（春興句）」とあれば、歳旦句に続いて歳暮句または春興句が組み合わせられるのが、パターン化していることを示すものとする。また「歳旦句」と書いた場合は歳旦発句を指し、「歳旦」と表記した場合は歳旦の連句、発句などを広く指すものとして区別して用いることにする。

それではまず、関東在住時期の蕪村句の入集する江戸春帖から見ていくことにしよう。いま、その内容を確認できた蕪村入集の当時の春帖に次の四点があった。それぞれを①～⑤の項目の調査結果とともに示せば、以下の通りである。

A 元文三年（一七三八） 巴人編『元文三年正月』

① 大本一冊、一二丁

② 歳旦三ツ物+歳旦・春興+歳暮句+追加歳旦句・歳暮句+冬唱和

③ 巻頭―「戊年歳旦」歳旦三ツ物（夜半亭宗阿・松洗・解糸）

巻尾―「題千鳥」冬唱和（朱英・宗阿）

④ 三ツ物（歳旦五・春興一）、表八句一、唱和一（冬一）

⑤ 全発句数二二九、歳旦七三（三二・五四・五％）、歳暮一三九（六〇・七％）、春興七（三・一％）、冬四（一・七％）

B 元文四年（一七三九） 巴人編『元文四年歳旦』

① 半紙本一冊、一八丁

② 歳旦三ツ物+歳旦・春興+歳暮・歳旦+冬唱和

③ 巻頭―「己未歳旦」歳旦三ツ物（宋阿・東湖・我兄）

巻尾―「題鴛」唱和（朱英・宋阿）

④ 三ツ物二六（歳旦二二・歳暮三・春興一）、唱和二（歳旦一・冬一）

⑤ 全発句数二二九、歳旦九〇（三九・三％）、歳暮一二三（五三・七％）、春興一一（四・八％）、冬五（二・二％）

C 元文四年（一七三九）楼川編『歳旦帳』

① 横本一冊、二十五丁

② 序＋歳旦三ツ物＋歳旦句＋春興句＋歳旦句＋歳暮三ツ物＋歳暮句

\* 江戸各地地名と歳旦景物との組み合わせ題による題詠句を載せる

③ 巻頭―序（一丁分）＋「元日」歳旦三ツ物（楼川・楼雲・挙遠）

巻尾―「軸」歳暮句（珪琳）

④ 三ツ物二（歳旦一、歳暮一）

⑤ 全発句数三八三、歳旦一四二（三七・一％）、歳暮二一六（五六・四％）、春興二五（六・五％）

D 元文六年（一七四二）巴人編『辛酉歳旦』

① 横本一冊、八丁

② 歳旦三ツ物＋歳旦＋各地「歳旦句＋歳暮句」＋歳暮句

③ 巻頭―「辛酉歳旦」歳旦三ツ物（宋阿・済通・我兄）

巻尾―「（大尾）」歳暮句（菊千）

④ 三ツ物四（歳旦四）、唱和一（冬一）

⑤ 全発句数一六三、歳旦七〇（四二・九％）、歳暮九一（五五・九％）、冬二（一・二％）

このうち、A B Dは、蕪村の師である巴人の春帖で、蕪村にとっては最も大きな影響を与えた春帖と考えられる。そこで、この三点をまとめて検討してみると、①体裁②構成の面ではA B Dは三書の間に通性が少なく、定型化していない点が注目される。また③巻頭・巻尾では、三点とも巻頭が三ツ物一組となっている（三ツ物三組ではない）。いま、巻頭発句を前書きとともに示せば、

A 皇都に遊ぶ事凡十余年、ことし古園に春を迎て

新しき友の外にも花の春

宗阿

B 古郷に三とせ住みして世中又新らしきやうにおぼえ侍りければ

我としの寄をもしらで花の春 宋阿

C あめつちのいでもの見せん福寿草 宋阿

となる。A Bの前書きに近況報告的要素があり、発句も自己の感懐を詠ずるものとなっている。また、A Bでは巻尾に冬の題による唱和を置くという独自性が見られた。Cにも巻尾ではないが、冬の唱和が収められており、このように歳暮句ではない冬の吟を載せる点も特色の一つと言えるだろう。④連句・その他⑤発句比率を見ると連句の種類としては三ツ物、唱和が中心で、数もそれほど多くないことがわかる。発句では歳旦句、歳暮句が中心で、特に歳暮句が半数以上を占め、春興句はAに七句、Bに十一句、Dには無しと、桁違いに数が少なくなっている。また、春興句の詠風としては

A 帰るかと妻や見てゐん門の梅 祐之

A うつり香と人ながめそ梅の主 古延

B 幕もたせどこへと問ば土筆狩 春賀

というような人事的趣向の句や

A ふり袖を雪の筩や若菜摘 巴喬

B 七草や君がためとて髭男 魚道

というような見立て、もじりの句などのように、趣向性の強い句がほとんどであった。

こうして見てくると、蕪村の師であった巴人の春帖は、特に春興句の詠風や発句に占める春興句の比率の面などで『宇都宮歳旦帳』とはかなり異なっており、『宇都宮歳旦帳』が巴人春帖に倣ったものではないことがわかる。ただし、巴人春帖が定型化したスタイルを持たず、年ごとに春帖の体裁や構成に変化を見せたり、また巻頭・巻尾の编者発句に自己の感懐をにじませる点などは、夜半亭継承後の蕪村編春帖の在り方とのつながりを感じさせるものがあるが、ここではこれ以上は触れないでおく。



次に、Cの倭川の歳旦帖について、巴人春帖とも比較しながら眺めてみると、まず、巻頭に一丁分の序を据える点に違いが見られる。また、「江戸の地名十歳旦景物」の取り合わせによる題（「神田の福藁」「霞ヶ関の初鶏」「佃島の蓬菜」など）で詠まれた歳旦句が載る点には趣向性の強さが見られる。⑤発句比率においては春興句が六・五%と巴人春帖よりは若干高い率を示し、配列の上でも春興句が「春興」の題のもとにまとめて配置されているのが注意される。しかし、巻頭に序に続いて歳旦三ツ物一組を置き、巻尾には歳暮句を据える点はDの巴人春帖と共通であり、春興句の詠風も

C うぐいすに歌を詠とや繪旨梅

烟外

C 辻君のまくら屏風やむめの花

燕之

C 梅が香や若衆の結ぶはかた帯

宜通

というような、擬人化や見立て、人事的趣向による句が目立っている。

### 三

では次に、蕪村と交流のあった江戸俳人たちの当時における春帖を見てみよう。管見では、以下の五点が目に入った。残念ながら寛保四年『「宇都宮歳旦帳」』刊行以前のものとしてはE一点のみしか見出し得なかったのだが、蕪村周辺俳人たちがどのような春帖を出していたのかを知る上では一つの目安になることと思う。やはり①⑤の五項目とともに示す。

E 享保二十一年（一七三六）露月編『辰歳旦』

① 横本一冊、一七丁

② 歳旦三ツ物十歳旦句十春興三ツ物・春興句十歳暮三ツ物・歳暮句

③ 巻頭―「佳節 七十歳を賀して」歳旦三ツ物（露月・財峨・雪井子）

巻尾―「年納」歳暮句（立圃）

④三ツ物二七（歳旦二三、春興三、歳暮一）

⑤全発句数二六一、歳旦七三（二八％）、歳暮一五〇（五七・五％）、春興三八（二四・五％）

F 延享二年（一七四五）旨原編『うしのとし』

①半紙本一冊、一五丁

②歳旦独吟歌仙＋歳暮独吟歌仙＋歳旦句＋春興句＋歳暮句＋追加歳旦句・歳暮句

③巻頭―「青陽吟」独吟歳旦歌仙（百万）

巻尾―「追加」歳暮句（赤羽）

④歌仙二（歳旦一、歳暮一）

⑤全発句数一六八、歳旦一三（七・八％）、歳暮一四一（八三・九％）、春興一四（八・三％）

G 寛延二年（一七四九）旨原編『歳旦』

①半紙本一冊、一二丁

②歳旦独吟歌仙＋歳旦句・春興句＋歳暮句＋各人「歳旦＋歳暮」句＋歳暮句

③巻頭―「歳旦」独吟歳旦歌仙（百万）

巻尾―歳暮句（百万）

④歌仙一（歳旦一）

⑤全発句数一五二、歳旦一九（一二・五％）、歳暮一二八（八四・二％）、春興五（三・三％）

H 寛延四年（一七五一）楼川編『辛未歳旦』

①横本一冊、一三丁

②歳旦三ツ物＋歳暮三ツ物＋歳旦句＋春興句＋歳暮句

③巻頭―「試筆」歳旦三ツ物（楼川・举遠・雨夕）

巻尾―「守歳」歳暮句（佳境）

④三ツ物二（歳旦一、歳暮一）

⑤全発句数二四一、歳旦九二（三八・二％）、歳暮一四六（六〇・六％）、春興三（一・二％）  
I 寛延四年（一七五二）祇丞編『辛未歳旦』

①横本一冊、十丁

②歳旦三ツ物＋歳暮句＋各人「歳旦＋歳暮」句＋歳旦・歳暮句＋春興＋歳暮句

③巻頭―「寛延四辛未／歳旦」歳旦三ツ物（祇丞・超風・東為）

巻尾―「大尾」歳暮句（祇丞）

④三ツ物六（歳旦六）、世吉一（春興一）

⑤全発句数一七七、歳旦四六（二六％）、歳暮一二八（七二・三％）、春興三（一・七％）

E の露月の『辰歳旦』は、②構成の面で歳旦・春興・歳暮の三部構成を取っている点が注目される。これは『宇都宮歳旦帳』の歳旦・歳暮・春興の三部構成とは順序が違うものの、三部構成を取る春帖が他にあまり見られないだけに注意すべきことと思われる。また春興句も三八句、一四・五％と今まで見てきた春帖の中ではやや高い比率を示している。しかしその詠風は

E 愛らしく梅をはさむや黒木売 宗瑞

E 出女の居なじむ頃や梅の華 安士

というような人事的趣向の句や

E 梅が香やあのもぎどうな梢より 弘武

E 知らぬ道鼻に習ふや梅の花 文軍

という理知的な作風によって占められており、

E 菽梅やあをち鳴立薄曇り 古道

のような平明な景気句は例外的な句として見る事ができるに過ぎなかった。

次にF Gの旨原の歳旦帖は、巻頭に三ツ物ではなく独吟の歳旦歌仙を置き（Fではそれに続けて独吟の歳暮歌仙も）、発句数に占める歳暮句の比率が非常に高い、などいくつかの点で特色ある春帖となっている。春興句数は少なくその詠風は

F はねかへる雪の小笹や春の色 育悟

G 我庵へ梅の匂ひの春季かな 男成

というような平明な句もたまに見られるものの全体としては

F 化彩した下女一人有り梅が宿 文麟

F 梅咲や匂ひは闇を飛ぶ螢 信鳥

G しだけけり根よりは下へ岨柳 貞嶽

G 梅咲や娘の顔もあかねさす 鬼画

のような趣向的な詠風である。

Hは楼川の春帖であるのでCと比較しながら見てみると、横本一冊という体裁や、歳旦三ツ物と歳暮三ツ物を一組ずつ載せるところはHとCとで共通だが、Hでは春興句の比率が小さくなり、数も三句のみと減ってしまっている。その三句を挙げれば

H 鶯の五文字出来てはつ音かな 衞祥

H 月請て糸口分る柳かな 知圭

H 梅咲や寝顔で出たる渡し守 杉夢

という具合で、どれも擬人化や人事的趣向の句という知巧的な句である。

Iの祇丞歳旦帖も春興句は三句のみであるが、春興発句による四十四句の連句（世吉）を収めるので、全体的な印象としては春興句の比率がHの場合ほど小さく感じられない。その詠風は、

I ふる年の爪に恥なし齋売 衞丞

I 雪の橋渡らぬ先の若菜哉

長梢

I 連翹や小径しとなき尼が庭

祇丞

というもので、やはり人事的趣向の句中心のものである。

#### 四

ここまで、蕪村入集春帖や蕪村と交流した江戸俳人の春帖など蕪村周辺の江戸春帖に注目してきたが、ここですらにもう少し範囲を広げ、蕪村が江戸に移住した享保二十年頃から『宇都宮歳旦帳』が版行される寛保四年以前の間に、江戸俳人によって出された春帖を取り上げてみることにしたい。これらの春帖もまたこの時期の蕪村が目にした可能性が考えられるものである。管見では次に挙げる七点があった。

J 享保二十年（一七三五） 沾洲編『享保乙卯歳旦』

① 横本一冊、二三丁

② 歳旦三ツ物＋歳旦句・春興句・歳暮句

③ 巻頭―「鶏日」歳旦三ツ物（沾洲・旭洲・湛洲）

巻尾―「守歳」歳暮句（岳雨）

④ 三ツ物四六（歳旦四六）

⑤ 全発句数三二一、歳旦一三〇（四〇・五％）、歳暮一八三（五七％）、春興八（二・五％）

K 享保二十一年（一七三六） 常仙編『神の梅辰歳旦』

① 半紙本一冊、二九丁

② 歳旦・春興＋「春興表六句＋歳旦（春興）」＋歳暮句＋追加

\* 挿画一画あり

③ 巻頭―「賦何壺俳諧之連歌」歳旦百韻（常仙・甘石・素丸ら）

巻尾―「四極」歳暮句（常仙）

- ④三ツ物三（歳旦二・春興一）、百韻一（歳旦二）、唱和二（春興二）、表六句八（歳旦一・春興七）  
 ⑤全発句数四六二、歳旦一二九（二七・九％）、歳暮三〇五（六六％）、春興二八（六・一％）  
 L元文三年（一七三八）紀逸編『平河文庫』

①半紙本一冊、二七丁

- ②「平河社参之吟」＋独吟歳暮歌仙＋梅三ツ物＋梅の発句・連句・漢詩・和歌  
 ③巻頭―「元文二年巳十二月十六日年内立春の夜／平河社参之吟」（紀逸）

巻尾―春興句（巴静）

- ④歌仙一、三ツ物六三、表八句一、十六章一、短歌行一、和歌一〇、七言絶句四（すべて梅）  
 ⑤全発句数二七〇、歳旦二一（七・八％）、歳暮八（三％）、春興二四一（八九・二％）  
 M元文四年（一七三九）不角編『曙染』

①半紙本二冊、上―二一丁・下―二七丁

- ②序＋歳旦三ツ物・歳旦句＋歳暮句・冬吟＋追加歳旦・歳暮

\*「歳旦三ツ物＋插画」という型多し

\*插画多数、匡郭あり

- ③巻頭―序（自序）＋歳旦三ツ物（千翁・止角・千丈）

巻尾―歳暮句（敲角）

- ④三ツ物六八（歳旦六七・歳暮一）、表六句一（歳旦一）  
 ⑤全発句数四〇三、歳旦三二八（八一・四％）、歳暮七二（二七・九％）、冬三（〇・七％）  
 N元文五年（一七四〇）紀逸編『平河文庫』

①半紙本一冊、三二丁

② 歳旦句＋「平河社参之吟」＋梅独吟歌仙＋梅三ツ物＋梅の発句・連句・漢詩・和歌

③ 巻頭―「鶏旦」歳旦句（紀逸）

巻尾―「殿辞」歳暮句（梅吞）

④ 歌仙一、三ツ物八三、短歌行三、和歌八、五言絶句一、七言絶句一（すべて梅）

⑤ 全発句数二八八、歳旦七一（二四・七％）、歳暮二三（八％）、春興一九四（六七・三％）

O 元文六年（一七四一）紀逸編『平河文庫』

① 半紙本一冊、三三丁

② 歳旦句＋「平河社参之吟」＋短歌行＋梅三ツ物＋梅の発句・連句・漢詩・和歌・仮名詩

③ 巻頭―「元文六辛酉／歳旦」（紀逸）

巻尾―「鶏旦」歳旦句（本末）

④ 歌仙一、三ツ物六〇、表八句一、短歌行二、半歌仙一、和歌三、仮名詩一（すべて梅）

⑤ 全発句数三三五、歳旦一〇四（三一％）、歳暮六七（二〇％）、春興一六一（四八・一％）、冬三〇（九％）

P 寛保三年（一七四三）柳居編『歳旦帖』

① 中本一冊、四九丁

② 編者歳旦歳暮句＋題詠による門下歳旦＋歳旦句＋春興句＋歳暮句＋題詠による門下歳暮句

③ 巻頭―「寛保三癸亥／歳旦」歳旦句（柳居）

巻尾―縞の名称による題詠歳暮句（鳥酔）

④ 連句なし

⑤ 全発句数八一九、歳旦四三八（五三・五％）、歳暮三七九（四六・三％）、春興二（〇・二％）

J、Pの七書については項目ごとに傾向を見ていくことにする。

まず①体裁は、最も多い半紙本の形態を取るものがKLMNOの五つで、このうちMは二冊本である。横本は

J一つで、『宇都宮歳旦帳』と同じ中本はPのみである。丁数はJ/Pまですべて二十丁以上であり、最も丁数の多いPは四九丁であった。

②構成はさまざまであるが、同じ紀逸編『平河文庫』であるLNOの三書はほぼ同様の構成を取り、全体をほとんどすべて梅の句ばかりで統一し、漢詩や和歌、仮名詩なども収めるなど他の春帖とは異なる、独自性の強い春帖となっている。これは『平河文庫』が、江戸平河の聖廟近くに居を移した紀逸によって、聖廟の神庫に奉納するために、諸家から梅の賀章を集めて編集されたものという性格の集であることによる。従って、ここで他の春帖と同列に扱うことには問題があるかもしれないが、⑤発句数とその比率を見るとわかるように歳旦・歳暮吟も収められ、しかも年ごとにその割合が大きくなる傾向を示しているのも、やはり春帖の一つとして、ともに扱いたいと思う。特に漢詩、和歌、仮名詩などを収めるという点で、後の蕪村編の春興帖『夜半楽』や『花鳥篇』との関連も思われるものである。また、M不角『曙染』は匡郭や多数の挿画が見られ、歳旦三ツ物に挿画を添えるというパターンで多数の三ツ物を載せているなど、江戸座春帖の一つの型を示すものと言える。

③巻頭は、歳旦三ツ物がJとM（その前に序を置く）、歳旦百韻がK、歳旦発句がNOPである。Lは「年内立春の夜」の「平河社参之吟」であり、年内立春であるので「春」の句と取るべきであろうか。一般的な歳旦句からはやや外れたものとなっている。

巻尾は、JKMNPが揃って歳暮発句。ここでも『平河文庫』はLが春興句、Oが歳旦句を巻尾に据えており、独自性を見せる。

④連句・その他の数では、Pが連句を全く含まぬ発句のみの春帖として目立つ。また、三ツ物のみを収めるのがJ。そのほかのものは、三ツ物以外にも連句を載せるが、特に先にも触れたLNOは、漢詩、和歌、仮名詩などを載せる点が注目される。

⑤発句数の比率でも、LNOは突出して春興句の比率が高い点で注目される。これは、もちろん『平河文庫』が平河聖廟へ奉納のために編集された、ほとんど梅の句ばかりの集であるところからもたらされる結果でもある



が、注意したいのは、春興句の比率が年とともに次第に下がる傾向を見せ、替わって歳旦・歳暮句が増えていることである。やはり次第に本来の歳旦帖的なものに近づく傾向にあったと捉えてよいのだろうか。さらに資料を集めて考えてみたい問題である。

それ以外のJKMPは揃って春興句の割合が低く、一〇%にも満たない。中でもP柳居『歳旦帖』は春興句二句のみで〇・二%に過ぎず、Mは春興句を一句も含まぬ歳旦・歳暮中心の歳旦帖となっている。

最後に春興句の詠風について触れておく。春興句の比率の高いLNOも含め、その詠風は今までに取り上げてきた江戸春帖と同様、趣向的知巧的なものであった、しかも

J 船頭のしばく潜る柳哉 錦国

K 植木屋の得手勝手なり窓の梅 楼雲

L 来る筈の人を待間ぞうめの花 露恵

N 振そでを口にくはへてわかなつみ 霞松

O むめが香やひかれくゝて宮廻り 光鯉

というような人事的趣向の句にしても、単に人事的な趣向と季題とを取り合わせるに留まらず、「しばく潜る」「得手勝手」「口にくはへて」など表現の上でも一捻りを加え、俳諧性をより強めている点が目につく。さらに、

K 梅が枝も弓手や馬手の腕を張り 栄峨

L 見つ見られ松に中よき梅の花 呉雪

N 立そふてさくらをせつく梅の花 沾長

P 柳にも青めと門トの若菜哉 秋石

のような擬人化の句や

L 紅梅に雪は蒔絵の下地かな 少風

L 鐘に散ル夕ぐれぞなし梅の花 敬雨

○ 蓑虫に梅の花笠開きけり

田社

○ 白むめはかの銀公の下着かも

蘿月

のような見立て、もじりの句も多く見られた。

これらの春興句の句例を眺めれば、当時の江戸俳諧の作風がどのようなものであったのか、理解することができよう。

## 五

最後に、今回取り上げたAからPまでの十六点の江戸春帖の検討の結果について、『宇都宮歳旦帳』との比較の上で特に重要と思われる、構成、春興句の比率、巻頭・巻尾、春興句の詠風の四点に絞ってもう一度まとめておく。まず構成では、『宇都宮歳旦帳』と同じ歳旦+歳暮+春興の三部構成を取る春帖は見られなかったが、歳旦+春興+歳暮の三部構成を取るものとして、E露月編『辰歳旦』があった。発句に占める春興句の比率では、LNOの紀逸『平河文庫』の三点が高率を示す以外は、十二点の春帖が一〇%以下で、残る一つが一五%以下の低い比率であった。また巻頭・巻尾では、巻頭に歳旦三ツ物を取るものがABCDEHIJと多数あり、巻尾に春興句を据えるものにLがあったが、『宇都宮歳旦帳』と同じく巻頭に歳旦三ツ物、巻尾に春興句を据えるという春帖は見られなかった。最後に春興句の詠風だが、A、Pの春帖のうち春興句を含まないDMを除いた十四点の春帖に収まる春興句の詠風は、趣向的知巧的な句風を取るものによって占められており、平明叙景的な句はごくまれに目にするのみであった。

以上、蕪村編集の最初の春帖である、『宇都宮歳旦帳』を蕪村関東在住の時期の江戸春帖と比較検討した結果は、構成の面でE、春興句の比率の面でLNOなど部分的に重なる傾向を見せる江戸春帖はあるが、これを総合して眺めてみると、師巴人の春帖も含めて、特に強い影響関係にあることを示すような春帖の存在を確認することはできなかった。

特に『宇都宮歳旦帳』に見られる春興句重視の姿勢に関して言えば、先にも述べたように、明和半ば頃から地方系蕉門俳壇の中に春興句を重視する傾向が表れて来ることが指摘されており、言わば時代の動向を先取りしたような、この編集態度がどこからもたらされたのか、江戸春帖との関係ばかりでなく、当時の宇都宮俳壇の状況、俳風について地方系蕉門からの影響も含めて明らかにする必要があるだろう。また一方では、以後の蕪村編春帖のすべてにおいて春興句が高い比率を占めており、春興句重視の姿勢を春帖編集における蕪村の一貫した態度と捉えることも可能である。今後さらに調査を進め、蕪村編春帖の特色とその意味について考察を進めていきたい。また、夜半亭継承後の蕪村春帖と江戸春帖との関係についても、検討を加えていきたい。

## (注)

- (1) 注(3)にも挙げる田中道雄氏「地方系春帖と蕪村一派」においては、「歳旦帖」と「春興集」との総称として「春帖」が用いられている。本稿では、それに対して「春興帖」の概念を新たに加え、「春興集」を「春帖」からは切り離して捉えることにした。
- (2) 栗山理一氏編『芭蕉・蕪村・一茶』(雄山閣出版、昭和五十三年十一月)
- (3) 『文学』第五十二巻十号、昭和五十九年十月
- (4) 勝峯晋風氏「春興歳旦帖概説」(『続俳句講座 第四巻 俳諧書誌篇』改造社、昭和九年八月)では、三ツ物の呼称を発句・脇・第三、三句の鼎吟三組を指すものと捉えられ、五ツ物の呼称をその傍証とされたが、その説に従えばこれは「七ツ物」と呼ぶべきものであろう。
- (5) 「梅ちるや」句の解釈については拙稿「蕪村句私解「梅ちるや螺鈿こぼるゝ卓の上」」(『俳文芸』三十号、昭和六十二年十二月)参照。